

(家庭数配布)



## 林間学舎に行ってきました！！

今月22日～23日、5年生の林間学舎が行われ、私も2日間同行しました。初日はあいにくの雨、どうなることやらと思いましたが、順番を入れ替えることで予定していたプログラムは全て行えることができました。

私がいちばん印象に残ったこと、それは何よりも子どもたちの笑顔です。魚つかみやキャンプファイヤーなど、友だちと一緒に楽しそうに取り組んでいた姿。後で5年生の保護者の方からも伺いましたが、おうちで嬉しそうにお話をするあまり、疲れているはずなのになかなか寝なかったとか…。よほど、今回の体験が思い出に残ったのでしょう。さあ、いよいよ来年は修学旅行です。ここ2年間はコロナの影響で、確実に実施できること、そして万が一のことがあっても対応しやすいということで行き先を京都に設定しておりましたが、来年については、特に何もない限り広島に向かう予定です。5年生の皆さん、お楽しみに！！

写真を撮りましたので紹介します。



魚つかみ



飯ごう炊さん



山登り



## ◇飯ごう炊さんの様子、併せて校長のつぶやきコーナー

今回の林間学舎で子どもたちの様子を見ながら、再度考えさせられた場面がありました。飯ごう炊さんです。薪に火をつけご飯を炊き、カレーを煮込むのです。宿舎の方からマッチ7本、新聞紙、割りばし、薪、食材（米、肉、野菜）が渡され、説明を受けた後、いよいよカレー作りに挑戦です。ところが…、まず薪に火を着けるところでひと苦勞。7本のマッチを使い切ってしまう、茫然と立ち尽くす姿も。しかし、宿舎の方はあえて手を出しません。私も、思わず「ああしろ、こうしろ。」と言いたくなりますが、ここはグッと我慢です。子どもたちが、自分たちの力でこの難局を乗り切れることを信じ、しばらくは見守ります。一方で、順調に薪に火が着き、ご飯を炊き、カレーを煮込み始めたグループも出てきます。すると、他のグループのところに割りばしを持って行き、火を分けてもらうという方法を取り出しました。子どもたちって、大人が助けてくれないとなると、自力で何とかするものです。そしてだんだんと火が大きくなり、無事、全てのグループでカレーを美味しくいただくことができました。さんざん苦勞して作ったカレーですから、その味も格別です。どのグループでも「美味しい、美味しい。」と言いながら食べていました。めでたし、めでたし。

では、ここからは私の持論を展開します。この紙面でも度々私が申し上げていることですが、「子どもたちにとって快適な環境を大人が用意してあげること、それが全て本当の意味で子どものためになるとは思えない。」です。火の着かない薪の前で立ち尽くす子に対して、どうすれば火を着けられるのかを教える、または火を着けてあげることは簡単です。しかし、それでは子どもたちに力はずきませんし、達成感を持たせることもできません。困っている子に対しあえて手を出さないのは「子どもたちが考える場面を奪わない」が大人の役割だと思っているからです。（なお、これは程度問題ですので、誤解のないようにお願いします。）

子どもたちが四苦八苦している様子を見ながら、宿舎の方ともお話をさせていただきました。

## たかがカレー作り されどカレー作り



長期間（4～5日間）にわたり宿泊している学校もあるようですが、同じようなプログラムをあえて2回入れることもあるとか。例えば、カレー作りとハヤシライス作りです。この2つ、ほとんど似たような作業になるわけですが、さすがに2回目になると、格段に段取りが良くなるということです。やはり「自分でやってみる、うまくいかないこともある、そこに創意工夫が生まれる。」が大事なのです。今回のカレー作りを見ながら、私はこの確信をさらに深めることができました。